

創刊にあたって

城戸毅

このたび名古屋市立大学人文社会学部の発足と共に、学部を構成する私どもの総意により、ここに『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』を創刊することになった。学部構成員の研究熱心とそれを発表したいという熱意の現れとして、心から慶びたい。事実紀要編集委員会にはすでに2号分の原稿が約束されているということである。

わが国の大学、特に国公立の大学では学部ごとに研究成果発表のための機関誌を発行することがほぼ慣例として確立しており、所属の先生方にとって発表の機会がこうして保障されているというのはまことに幸いなことであると思う。学問分野によってはその分野の共通の広場としての全国的学術誌が少いという事情もあるので、「紀要」の必要性は決して小さくない。この意味では「紀要」は確かに学部には必須といえよう。しかし他方ではこうした無数の「紀要」の刊行はさまざまな不便や問題をも孕んでいることも率直に認めねばなるまい。それらは主に次の三点にまとめられる。その第一は「紀要」は頒布が限られているところから広く読まれる機会が少く、また読者の側から見ても参看に不便だという点であり、第二は内容や水準が雑多である上に、特定の専門分野との結びつきが薄い為に市場性がないこと、第三は執筆者の範囲が限られているために、同人雑誌化しやすいという点である。これらはいずれも「紀要」という刊行物の性質上避け難い点で、発表機関としての利点が大きいので、発行者の側は多くの場合これらの難点を敢て問うことはない。しかしこれらの難点は何とか克服できれば、克服するに越したことはないので、それらを多少とも克服していると評価された「紀要」は普通の「紀要」であることを止めて、全国的学術誌に匹敵する地位を獲得しているのである。従って私どもの紀要もできる限りこうした点に留意して、これら難点の克服を目指すべきであろう。その際に比較的に着手しやすく、また「紀要」の限界を破る突破口として注目すべきなのは、寄稿者の範囲を広げることである。「紀要」は本来的に特定の大学〔の特定の学部〕に属するものだから、その〔学部〕構成員の研究業績が毎号紙面を飾るはずだし、またそうなくては困るのだが、それは厳格に閉鎖的であるべきではなく、何等かの形で学部と関係を持つ或いは持たない外部の研究者からの寄稿・投稿に開かれてあるべきであろう。私ども自身の姿勢と力量によっては、「紀要」は学部構成員ばかりでなく、より広い学界のフォーラムに成長して行くこともできるのである。幸い私どもの学部は中程度の規模を持ち、学部構成員の等質性も高いので、これに部外からの質の高い寄稿を得られれば、私どもの紀要の学術誌としての魅力が高まることも期待できる。

私どもは今や私ども自身の学術的広場を獲得した。これを手掛かりに学部の研究を振興し、今後これをどのように育てて行くかは私ども自身にかかっている。